第７回　小中一貫教育校検証部会　会議要録

開催日時		平成 26 年 10 月２日（火）　午後２時～午後４時
会　場		小中一貫教育校大泉桜学園
出席者	委　員	酒井朗　花園主計　下村恭子　近藤みちよ　金子靖子　小澤久美子 玉井弘子　西村貴　冨岡弘美　木下川肇　田頭裕　池田和彦
	事務局	統括指導主事、新しい学校づくり担当係
傍聴者		なし
案　件		（１）前回議事録について （２）意識調査の補足資料について （３）ヒアリング（教職員）の結果について

１　開　会

部会長

先生方に夏休み前から夏休みにかけていろいろお話を伺いまして、今日は、そのヒアリングの結果を中心にご報告いたしますので、いろいろご感想、ご意見をお願いいたします。

２　案件

（１）前回議事録について

事務局

（説明）

（２）意識調査の補足資料について

部会長

次に意識調査の補足資料について、事務局から説明をお願いいたします。

事務局

（説明）

部会長

資料１は、中学に入るときに自分が住んでいる学区の中学校に進んでいる割合が書いてあります。練馬区全体では大体どの年も 75%程度です。それ以外は私立の中学などに進学している子どもたちになります。大泉桜学園の場合は、小中一貫校になる前はかなり低くて 40%台だったのですが、小中一貫校になってからは 65%ぐらいのところで大体推移しているという資料になります。ですから、小中一貫校になって大泉桜学園の学区域に住んでいる子どもたちは、この学校に進学する割合がぐっと増えたということになります。

それから資料２ですが、問１２のところは、大泉桜学園から進学（161）と書いてあります。これは、７年生から９年生までの生徒のうち大泉桜学園の小学校から上がってきた子どもたちの状況です。大泉桜学園以外から進学（63）と書いてあるのが、7 年生から９年生の生徒のうち、大泉桜学園に７年生になって入ってきた子どもたちです。

問 14 をご覧ください。中学校に上がるときに何が不安だったのかという設問ですが、かなり大きな違いが出ています。大泉桜学園で下から上がってきた子どもたちは、友達がかわるという不安は多くなくて、圧倒的に勉強に集中しています。ほかの不安が少ない分、勉強に集中しているということだと思います。これに対して大泉桜学園以外の小学校から来た子どもたちは友達がかわるという回答がかなり高くなっています。そういう結果が出ていました。

何かご質問やご意見ございましたらお願いしたいと思います。

事務局

資料１について補足させていただきます。資料１では練馬区全体の数字が 75%前後で続いておりますが、これは国公私立に進学する子どもたちと、中学校の選択制度を利用して他の区立中学校に進学するという生徒もいる中での数字です。大泉桜学園におきましてもそういう数字が影響してくると理解していただきたいと思います。

部会長

何かご感想なり、数字を見てのご意見はございませんでしょうか。

委員

兄弟３人全員、緑小から 7 年生になって大泉桜学園に来ました。下から上がってきた子どもと外から入ってきた子どもの結果を見ると複雑な思いがあります。

事務局

検証作業ではどうしても、大泉桜学園の小学校を卒業した子どもと大泉桜学園以外の小学校から進学してきた子どもを分けて検証せざるを得ないということがあります。

部会長

設問 12 は、大泉桜学園以外から来たお子さんのほうが期待を膨らませて進学してくるという結果も出ています。総合的に一貫していくことが、学校教育上どういう意味があるのかというようなことを考える上の資料ですが、その質問の仕方については、また今後とも配慮しながら進めていきたいと思います。

事務局

児童・生徒会の役員の子どもたちからも話を聞きました。その中のほかの小学校から入ってきたというお子さんで、「小中一貫教育校だからここを選んだのだ」というようなことを言う子もいたので、この学校だからこそという気持ちで入ってきた子どももいるんだということがわかりました。

部会長

ご指摘は重く受けとめて、最終的なとりまとめ方についても少し検討していきたいと思います。

委員

私の子どもは２人とも一貫校になる前に小学校を卒業生しました。上の子はちょうど選択制度の始まった年に６年生で、選択させていただいてこちらに来ました。下の子はやりたいものがあるというので、選択制度を使ってほかの学校に行きました。この子は中学校でどうしてもやりたい部活があったのですが、たまたま桜中学校にその部活がなくて、選択の対象から外れてしまったというのが一番でした。一貫校になってから大泉桜学園では部活の数がすごく増えたので、選択する上でほかの中学校を選ぶ必要性がなくなったということも学区域内からの入学者が増えた大きな原因だと思います。

部会長

確かにそういうこともあると思います。子どもたちの数が増えることによって、また部活が増えるという部分もあります。

委員

先生たちも一生懸命やってくださっていて、小学校からその部活を見てくれているというのも「ここに行こう」ということを決める要因の１つになっていると思います。

今までバスケットボール部がなかったのですが、それができました。うちの子どもは小学校からミニバスをやっていたので、どうしてもほかの部活を選ぶ気持ちになれず、それでほかの中学校を選択しました。桜中学校はバスケット部がなかったので選択の中から外れてしまったのです。そのころは野球部もなかったので、野球をやりたい子はクラブチームに入るか、もしくはほかの中学校に行くかということになっていました。

ブラスバンド部も大きくなってきましたが、やはりそういうことは大きいと思います。親にとってはそうでもないのかもしれないのですが、子どもにとっては、高校でも続けたいと思うと中学でやらないと高校で一歩遅れてしまうという思いがあって、どうしても中学校でやりたいという子どもが増えてくるのだと思います。部活は子どもにとっては大事な要素の１つだと思います。

部会長

そういうこともかなりあると思いますので、小中一貫校になったときに子どもたちの数が増えて、部活がどのぐらい増えたかとか、小中一貫の変わり目で何がどう変わったかということを併記することで、どうして４割台から６割台に２割も伸びたのかということの説明になる可能性があると思います。またこちらのほうも確認していきたいと思います。

ほかにはいかがでしょうか。では、何かありましたらまた後でお伺いしますので、次に進めさせていただきたいと思います。

（３）ヒアリング（教職員）の結果について

部会長

先ほど申し上げたように夏休みの前後にかけて、いろいろなお立場の方にヒアリングを実施しました。その結果について事務局から説明をお願いいたします。

事務局

（説明）

部会長

資料３－１をご覧ください。１番の枠ですが、９年間を通して指導するという体制を先生方はどう評価されるのか、いろいろなご意見がありました。例えば 50 分授業についても小学校籍の先生方、中学校籍の先生方でさまざまなご意見があり、50 分あることでかえって確認のための問題ができるなど、５分長くなることでのやり易さをおっしゃる先生も結構いらっしゃいました。

逆に小学生の 20 分休みが短くなることで高学年の子どもたちが外に出て遊ぶ時間がそれだけ減るわけで、それをどう考えるか、ご意見はいろいろでした。

それから黒点の２番目のところに書いてあるのですが、校種を超えて相互に協力するという体制が非常にできている、これはほとんどの先生方から聞くことができました。大泉桜学園は職員室が１つで小学校籍の先生方、中学校籍の先生方が密接にコミュニケーションをとられています。学校によっては、一緒になっているのだけれども見えない壁があって、小学校の先生、中学校の先生がほとんど別々に動いていらっしゃるというようなところもあるようです。それから考えますと、この学校は校種を超えて非常に密接に先生方のコミュニケーションがとれていて、子どもたちの様子も情報交換されているという話はかなりいろいろな先生から出ました。ヒアリングの結果からそのように感じました。

ここまでで何かご意見、ご感想等ございましたらいただきたいと思います。

委員

学習のことでいろいろなことをご尽力されているということはよく理解できるのですが、資料２の問 14 で、中学校に進学することで不安に思ったことという設問に対して、桜学園に在籍していた子どものほうが、勉強について不安に思っている割合が多くなっています。この数字をどういうふうに解釈したらいいのでしょう。先が見えるから不安に思うのだろうといった考えもありますし、中学校先取りという取組みを始めたから不安になっているという考えもあるかと思いますが、その辺についてこの後、少しまた考えてみていただきたいと思っています。

部会長

５年生から 50 分の授業で、中学生のことも間接的には見えているような状況の中で、どうして勉強の不安がこれほど高いのかということについては、確かにどのように考えたらよいのでしょうか。

事務局

私もこれだという答えを見出せません。

部会長

アンケートという形をとっていることも原因の１つになっていると思われます。不安に思ったことは何ですかという設問に対して、全部に「不安だ」と答えても構わないのですが、下から上がってきた子どもたちは、友達はほとんどかわらないので、恐らくそこには不安はないと思います。そうしますと、それ以外のことでは、中学校の先生のこともそれまでにいろいろなところで見知っていますし、そういうことで勉強という答えに集中したという部分もあるのかなと思います。１つの憶測に過ぎませんが、そういうふうにも考えられます。

ただ、ここはもう少し考えなければいけないところだと思います。

ほかにありますか。

委員

今のお話につながるかどうかわからないのですが、５年生、６年生から不定期ですけれども中間テスト、期末テストというものが、中学生の７～９年生と同じ時期にあります。中学校のテストと同じように先生が独自に作られるペーパーテストです。

もちろん小学校でやるような業者が作成したテストもやるのですが、理科、社会については教科担任制ですので、その先生が独自につくったテストを行います。となると、なかなか 100 点はとれないということがわかってくるので、子どもたちにはちょっと不安があるのかなと思います。

子どもにもよるのでしょうが、中間テスト、期末テストのたびに、２週間前から自宅で計画的に試験勉強をしていくというやり方について行けずに、そのまま受けてしまう子どももいると思います。一方で、２週間前から本人なりに一生懸命計画を立てて意欲的に取り組んでいる子どももいるようです。その差はすごくあると思うので、それをとても不安に思う子どもと、前に体験しているから中学校に上がっても、中間テスト、期末テストというのはこういうものだというのがわかっている子どもとで差が出てくるのではないかと思います。

部会長

かえって大変さを感じてしまうということですね。

委員

担任の先生の持っていき方がとても上手なので、そんなに負担になるような感じではありません。うちの子どもも楽しみに中間テスト用、期末テスト用のノートを作っています。そういう形でスムーズに中学校の勉強に入っていければと思っています。

上の子どもは中学３年生なのですが、中学校に上がったときに、こういうことはやったことがあると気づいたようで、入る前は不安だったけれども、ちょっとやったことがあるということで、本人の中では中間テストが怖いとか期末テストが怖いという感覚はないようです。

給食の時間が短くなったことについてですが、先日、保護者を集めて給食の試食会が行なわれました。その際に、中学生の量の給食を出していただきました。これを 20 分で食べるというのはとても大変なことで、一生懸命食べても 20 分かかりました。５、６年生では、量は減るのでしょうが、配膳もありますので 20 分で食べるというのはとても大変だと思います。廊下がちょっと長いので、５年生の最初のうちは配膳の手伝いが要るのではないかという話はよく聞きます。

委員

休み時間なので子どもたちがわあっとなっているところを運んでいくのが大変なので、食べる時間が 10 分になってしまった、15 分になってしまったという話を聞いたこともあります。このことは確かに考える必要があるかなと思います。

部会長

５年生にとっての給食が短くなることが、なかなか難しいところのようですね。

ほかにはいかがですか。では最後まで行って、また何かここでということがありましたらご意見いただきますので、次に進めさせていただきたいと思います。では、２番目のところの説

明をお願いします。

事務局

（説明）

部会長

ここは５年生、６年生から７年生の移行のところです。連携が図りやすくなって情報交換が非常にできているということで、いろいろな問題が起きたときにすぐ中学校の先生が小学校の先生にいろいろ意見を聞けるとか、小学校の先生から情報を得ながらクラス編成ができるとか、そういうことができている状態という報告をいただいています。

もう１つは、７年生になるときに学校生活への適応が非常にしやすいということが、子どもたちの調査からも出ています。一方で先生方からは、７年生がちょっと幼いのではないか、自覚が足りないのではないか、小学７年生になっているのではないか、学校がかわらないので７年生になったことの意識の変化があまり見られない、そのままスッと上がってしまっているのではないかといったご意見があります。

それから、この学校は、学校の設置上、小学校と中学校ということもあって、養護の先生がそれぞれに１人ずついるという形で運営されており、両方の先生方が協力しながら相談室や保健室の運営に当たられています。特に５年生、６年生の場合は柔軟に対応できるようになっているところが１つの特色かなと思います。

ご感想、ご意見ありましたらお願いします。

事務局

補足させていただきます。資料づくりで大事な観点が抜けておりました。資料３－２の９ページに特別支援教育の取組状況が入っていますが、この資料３－１から漏れていました。お聞きしたお話の内容としては、一貫教育校になって特別支援教育のコーディネーターが小学校、中学校両方におり、養護教諭も２人いて、連携をしながら早期に対応していけるよさがあるという話がありました。一方で、早期に対応する努力はしていても、なかなか効果が出なかったり、早期にやっていてもずれ込んで、上の学年での対応になったりということもあって、現状の苦労などをにじませながらのお話もありました。一貫教育校になって早く連携できるというお話は、この資料３－１のほうに載せてありますが、同じことが特別支援教育についても言えるということです。

部会長

それも含めてご感想、あるいはコメント、ご意見ありましたらお願いいたします。

ちょっと補足的に言いますと、例えば学校医は小学校と中学校で分かれています。これは、組織上は小学校と中学校に分かれていますので、それぞれで配置しているという形になります。今、文科省のほうで小中一貫教育校という新しい学校種をつくる方向で審議が進んでいます。そうすると法律上も１個の学校になりますので、恐らく学校医はその中で一本化されるのではないかと思っています。

一方で、養護教諭の配置が今は２人となっていますが、これがそのまま２人でいけるのかどうかが懸念されるところです。一緒になることによって１人になってしまったら、１年生から９年生まで全部を見る養護の先生というのは、これはかなりきついのではないかと思います。何とか今の制度のいいところを残したまま小中一貫の学校にできないかと考えております。そ

こは具体的な詰めのところで文科省に提言しなければいけないところです。そういう意味では、ここでこういう形で養護の先生が２人で役割分担しながら協力し合ってうまくできているというお話が出ていることは、今度、文科省に上げるときに非常にありがたいことです。

委員

小学７年生は、開校の年に４年生でリーダーを経験しているわけですね。その後、成長していないということなのか、どうなのか、その辺の分析をよくしていけば、あるいは、最初の年だったので、まだ十分に４年生としての活動がされていなかったが、それから年を追ってだんだんと４年生のリーダー性がついてきて、その後、発展的に育ってきたということがわかると思います。

部会長

この学校では、４年生が１期の最上級生としていろいろな役割を担ってリーダー性を高めていく、２期のところでは７年生がその中の最高学年として防災リーダーなどを通してリーダー性を高めていくという仕組みになっているのですが、４年生のリーダーを経験して７年生になった子どもたちが今、どうなのかということですね。

事務局

小学７年生という表現ですが、これは大泉桜学園の教育の中で出てきた言葉なので、出てきた背景やそのニュアンスを、校長先生にお話しいただいた方がいいと思います。

一方、でそういう指摘について保護者の皆さんがどういうふうに感じていらっしゃるかもお聞きしてみたいところです。

部会長

では、校長先生、お願いいたします。

委員

小学７年生というのは、学校評価を行なったときにある教員の意見の中に書かれていた言葉です。その指摘が正しいかどうかはともかくとして、言い得て妙というか、不可思議な要素を持っていておもしろい表現だなということで、私はその表現を評価しました。評価しましたがそれは一部の教員の見方であり、事実かどうかはまた別の問題です。なぜその教員が小学７年生ではないかと思ったのかですが、ある面で６年生から７年生への円滑な移行があって、教員が見ていてもそこにある劇的な変化がないことから、そういう見方をしたのだろうと私は感じています。

ただ、私自身は中学校籍の校長で、最近、とみに中学１年生が幼稚化しているということを痛切に感じてきています。いろいろな要素があると思いますが、社会全体がある程度、成長を先送りにしているのではないでしょうか。大人も同じですが、それが下の年齢にも降りてきているのではないかと思います。そういう傾向があるとともに、皆さんも経験していると思うのですが、中学１年生が学校の中で最下級生になることで、私からいえば幼児返りをしているということを中学校の教員をやっていてすごく思いました。小学校の６年間で培ったものが、なぜこんなに幼児返りしてしまうのだろうと思っていましたが、それが小学７年生という受けとめ方とある程度リンクするだろうというふうに思います。繰り返しますが、小学７年生という表現は、全員で合意形成できている認識ではないことにご注意ください。

そんなことを考えると、リーダーシップを育てるということでいえば、小中一貫教育校は４年生、７年生、９年生というふうにリーダー性の養成の節目が３回あるという点では、アドバンテージは小中一貫教育にあるだろうなと私は思って、そういう教育課程のカリキュラムのつくり方をしています。

委員

確かに小さいときからずっと見ていまして、今の７年生は確かにおとなしいのですが、それは、その子どもたちの性質上のことかなと思います。私も聞いていて、校長先生の言うことが言い得て妙と思ったのですが、子どもたちそのもののいる空気感とすると本当にそのとおりなのです。ただ、ここで問題提起というか、私があえて皆様にお伺いしたいのは、リーダー性って何を教育の場で求められているかということです。今の７年生を見ると、下と上をつなぐという重要な側面をしっかり担保してやっている子どもたちだと思いますし、穏やかであるがゆえにこの学校の中のすごくいい空気が流れていることも事実だと思います。リーダー性というのは通常、社会に出るとみんなを引っ張っていく力、革新・イノベーションを起こす力という感覚がありますが、７年生が本当にそれを追求するべきなのでしょうか。むしろ今の教育という部分で、もっと創造性だとか自主性だとか、そういうことが備わっているかということを見ていただくのもここでは重要なのかなと思います。

この間、生徒会の手紙が学校から参りまして私はすごく感激したのですが、そこにいる子どもたちはある程度意識を持った、リーダー性を持っている子どもたちでした。その子たちの言葉の一つひとつに、下の子はまさに先生が評価されていらっしゃるとおり、先輩を見て非常にいい経験ができたと子どもたち全員が書いていました。これはすばらしいことです。普通、生徒会は中学１年から３年のところを、ここは５年生からやっていまして、５年生の子も６年生の子も中学部も、先輩の動きを見て勉強になったというふうに書いてありました。その子たちのリーダー性は確かに育っていて、７年生も同じように先輩の姿を見て勉強になったと書いています。逆に中学３年生の言葉を見ると、上に立っていい経験ができたというふうに書いてありましたので、この学校の子どもたちにはリーダー性がちゃんと備わっているのです。

今の子どもたち全員をリーダー性という視点でとらえるというのはいかがなものなのかということで考えると、違う視点で７年生を見ていただきたいというのが、私が思っているところです。むしろ、真ん中に入っている８年生もおとなしいほうだと思いますが、桜学園全体が子どもが穏やかだというのは確実なので、この学校の個性ということである程度割り切っていただいた上でこの議論をしていかないと、小中一貫教育だから全て７年生に焦点を当てて、あとは学年ごとに終わるだけではいけないというふうになっていくのは、お話を聞いていて少し怖いかなと思いました。むしろその個性をどう生かしていくのかというところで話が進んでいき、そういう視点での検証も非常におもしろいかなと、これを見て思いました。

部会長

この学校なりの子どもたちの育ち方を評価する目線が必要なのではないかということですね。

委員

一般論では測れないという気がちょっとします。もちろんそうではない議論だと思うのですが、カテゴリーがあってそこに当てはめるのはやはり無理がある（難しい）と思います。先ほど先生も、いろいろな小中一貫教育のスタイルがあるというふうに言われましたがその通りだと思います。

委員

幼いというのは漠然としていますが、どう幼いということなのでしょうか。幼いといってもいろいろな側面があって、全体的に幼くない人というのはいると思います。

事務局

先ほど校長先生のお話がありましたが、一部教員からそういう意見があったということで、事務局として幼いというように判断したわけではありません。

委員

このエリアの中学生は本当にみんなおとなしくて子どもっぽいと思います。

部会長

全体的な傾向としてそういう点があるということですね。

委員

小学校を見ていても近隣の中学校を見てもみんなおとなしい感じで、ちょっと子どもっぽいというか、カメラを向ければ寄ってくるようなところがあります。ちょっと離れた中学では少し違う感じもあったりします。

事務局

ヒアリングの中で、小学７年生という話題の中では必ずしもマイナスではなくて、変にひねくれたり、大人びたりしていないで、素直にそのまま育っているというふうにおっしゃっていた先生もいらっしゃいました。

委員

小学７年生という話は、保護者の話の中で出た表現でもありました。保護者の中で「もう全く小学７年生なんだから」とおっしゃっている７年生の保護者の方々もいらっしゃいました。それは本当に悪い意味でもあるかもしれないのですが、まだまだかわいいと、そういうところがあるともとれます。それに本校はすごく穏やかなまま９年生になっている。今の９年生は実は開校した当時６年生でした。６年生ですので小学校でいうと最高学年になるというところで東校舎から西校舎に移って最高学年ではなくなってしまいました。

真ん中になって、７年生になったときに防災リーダーも任されないまま７年生を終わってしまった学年なのです。まだいろいろなシステムがつくられていく途中だった学年です。９年生になってようやく一番上という経験を持った子どもたちですが、いずれにしても９年生がすごく穏やかで物静かで、しかし粘り強いお子さんが多いなという印象なのです。その空気感が全校的にあるのではないかなと思っています。

委員

保護者もみんな穏やかなのですね。やはりそういう親が育てているということがあるのではないかなと思います。

委員

最初、立ち上げは本当に先生も大変だったと思いますが、保護者の方も、どうなるのだろうというのですごくいろいろ不安になったと思うのですが、それが３年間たってうまく流れて、今、ここに来ているとなったときに、保護者のほうも、あっ、こういうふうに流れるのだというのを覚えてきたと思います。今の１年生などは一貫校として入ってきているので、保護者の方たちもそういう問題的なものを感じずにスッと入れているような気がします。

部会長

確かに近隣に全くないタイプの学校ですから、保護者の我々も知らない世界で、小学校と中学校が一緒になった学校というのはこれまで存在しなかったので、最初はいろいろ不安や戸惑いもありましたが、今はもう保護者の方々も理解され、ああ、こういう学校生活を子どもたちは送るのだということがわかってくるようになってきました。そういう時期ですね。それが穏やかさとか、先ほどから出ているある種の空気感という、この学校なりのよさをつくり出しているということになってくるのかもしれません。

今のお話とかなり重なる部分があるのですが、次のところを事務局からお願いいたします。

事務局

（説明）

部会長

いろいろな形で異年齢集団での活動が豊富にありまして、それについてのご意見が出ております。先ほどの話にもかなりつながる部分があります。何かお気づきの点等ございましたら、いかがでしょうか。

委員

先ほどお話があったリーダーという考え方ですが、私もそのご発言を聞いていて、なるほどなと思いました。リーダーという言葉をここで定義するのは難しいのですが、ちょっとコメントしておかないとまずいかなと思いました。３番の項目ではリーダー性ということがかなり出ているのですが、先ほどお話があったことがかなり正しいと思います。学校現場の教員がなぜリーダー性を強調するかというと、１つには、リーダー性とともにリーダーシップという言葉がありますが、リーダーシップというのは当然、フォロワーシップがないと成立しないわけです。そこで子どもたちの協調性とか協力性とか、そういうことを学校現場では子どもたちに身につけさせたい力というふうに思っています。

もう１つは、的確な判断力を持って正しい行動ができるということで言っているのです。逆の言い方をすれば、付和雷同的に行動するのでは困るということです。これは社会にとってすごく大事な要素です。もう少し簡単に言えば、それは自立ということだと思います。教育は自立させるためにやっているわけです。家庭でも、親は子どもをいかに自立させるか、おむつが取れるところから始まって、自立させることを目指します。学校教育は集団の中でいかに自立させるかです。そのときにリーダー性が必要だというような言い方をするのは、追随するのではなくて、自分で判断し正しく行動できるようにする、これに尽きていると思います。

何も児童・生徒会の役員だけがリーダー性を持っているわけではもちろんありません。私は昨日まで移動教室に５年生を連れて行ってきましたが、リーダー性を育てる場面はたくさんありました。実行委員になることもリーダー性、食事当番になって配膳をするときもリーダー性、行動班で班長としてやるときもリーダー性、学習係としてみんなを学習的な興味に引っ張って

いくのもリーダー性、そのときには班長もフォロワーシップを発揮しなければならなりません。キャンプファイヤーをやるとき、キャンプファイヤーの係の子はマイクを持ってリーダーシップを発揮しますが、他の子どもたちはそのときに勝手なことをするのではなくて、ファイヤーを囲んでめいめいがみんな楽しく盛り上げていくのがフォロワーシップなのです。そういうことでリーダーシップというのは問われているのだろうというふうに見ていくので、その延長線上に、新しい価値を生み出して社会を改善するようなリーダーシップも育ってきます。小中一貫教育校として１年生から９年生のスパンで考えると、いろいろなチャンスとかいろいろなアレンジができるのではないかなと私は思っています。

今の６・３制が悪いとは言いませんが、９年間の中でそういう仕組みができればなと思っています。その典型的な例が本校で実施している飯ごう炊さんです。最初は９年生まででやっていましたが、今は５・６・７年生で実施しています。そのほうがリーダーシップ、フォロワーシップが発揮できると思います。８年生がやっている職場体験の現場を６年生が見学したりする関係性もそうです。７年生が職業調べした内容の発表を５年生が聞く、そういう学習を通じて、判断力、行動力を身につけた上で、８・９年生を通して今度は論文で自分の言葉を紡ぎながら、ある程度まとまった考え方を発表できるような力を培っていきたいと思っています。

これを読んで、また、ご発言をお聞きして、何かすてきだと思いました。

部会長

リーダーとは何かということが、まさに先生のおっしゃるとおりだと思います。

委員

リーダーと言わないとだめなのでしょうか。いろいろな意味で使うから、便利な言葉なのかなと思うのですが。

部会長

集団の中で動かしていくときに、子どもたちにリーダーという言い方もします。先ほど先生が言ったように、飯ごう炊さんだったりキャンプだったり、いろいろなところで何か役割を持たせると、やはりそこにリーダー性という言葉で話す部分があるのだと思います。ですから、それは責任という言葉でもいいのかもしれませんし、ある場面では自立という言葉でもいいのかもしれません。

委員

生徒に明確な責任を持たせて行動させ成長させたいと思っています。それを表す言葉としてリーダーシップなのかなと思っていました。

委員

もっと日本語でもいいのかなと思います。

部会長

確かにおっしゃるとおりですね。

委員

いつも気になっているのですが、「じりつ」は、「自立」ではなくて、「自律」を使いたいです

ね。学校の中での融和性というものがチームをまとめていくのだと思います。チームビルディングみたいな、そういう捉え方で学校を見ていくと、いろいろな学年が一緒になっていてチームを１つずつつくって、それをみんなが一緒に支えて融和性を持って、調整しながらやっているというところは、この学校はちゃんとできているように思います。そう思って少し課題を述べさせていただきました。

部会長

「リーダー性」という言葉でさまざまなご意見をいただきました。評価ということを超えて今後、この課題をどういうふうに捉えるのかということで随分ご示唆いただきました。ありがとうございます。

次のところを、事務局お願いいたします。

事務局

（説明）

部会長

概略だけ説明していただきましたが、学校運営面で、副校長が３人いらっしゃるとか、栄養士が２人いらっしゃるとか、小中一貫校ならではの体制ができています。それぞれの先生方が協力していろいろなことに対応されているという意味では、非常にいい形で回っている部分があります。逆に、今は小学校と中学校が法律上分かれているので別々に対応しなければいけないことも多く、煩雑さもまだついて回っているという部分もあります。

何かご感想、ご質問ございましたらお願いします。

委員

小中一貫教育校は新しいタイプの学校ですから、日々新しい課題が出てきます。教員の指導面に関わることだとか、学校の予算であるとか、備品台帳、施設・設備の管理であるとか、そういったことがここで触れられています。これまでも練馬区教育委員会から全面的な支援を得て学校は運営されていますが、教育委員会にとって想定外のところもたくさん出てきています。現在、予算の面では小学校と中学校は別ですが、そもそも小学校と中学校という縦割りを無しにしている学校ですから、小・中の区分で予算配分なんていう考え方は学校の中では当然ありません。そういうところをより柔軟に考えられるシステムづくりが教育委員会に求められると思います。この検証というのは、大泉桜学園の敷地内で日々営まれている教育活動を検証するという考え方ですが、その学校運営について教育委員会がどのように適切に対応できるのか、ということが本来問われることも考えられます。例えば練馬区の学校や幼稚園と教育委員会の間でいろいろなことを共有できるパソコン環境が構築されているのですが、残念ながらそれが小中一貫教育校にとって不十分な状況にあります。小学校、中学校で分かれてしまうのです。そういうことも含めると、ちょっと指摘せざるを得ません。

部会長

これは大変重要なところで、組織運営上、より円滑にこの制度が動くためには運営体制にどういう配慮が必要かということのまさに検証になります。ですから、ここでいろいろ出た課題や、こういう形だから運営できるのだという部分はきちっと挙げていかなければならないと思います。

委員

さきほどの養護教諭もそうなのですが、１校１人の職場配置になっています。それが、２人いることでいろいろなことが相談でき、校長にも直接具申できる、そういうパワーを持つことになります。ここはこういうふうにやったらどうでしょうというようなことがいろいろなところから挙がってきます。直接、私のところに入ってくることもありますが、諸会議で、もうちょっとこういうところを改善したいという課題の解決に向けた意見が出てくるという点、小中が一緒に１つの学校で、そういう力を生み出すという点では、非常にいいなと思っています。

部会長

小中が一緒になって、配置が２人になるということはいいことですね。この２人体制を維持していく方向で行きませんと、この話はどちらかというと予算の圧縮という方向に流れがちです。事務職の配置も、一緒になったのだから１人でいいではないかという議論になってしまうと本末転倒になってしまいます。そこは今後の具体的な小中一貫教育校の基準づくりというところですごく大事なところです。

では、５番のところと６番のところ、お願いします。

事務局

（説明）

部会長

これもかなり大事なことで、１年生と９年生が同居するというのは、体格的に全く違う人たちが生活する場ですので、それへの配慮が必要だということが施設ですとか給食ですとか、いろいろなところから出てきています。学校建築上もそれこそ階段の高さの基準から違うので、それを１つにするときにどうするのかという問題があります。大泉桜学園は２つの校舎を合わせていますからそのままでいいのですが、今後できる小中一貫校の校舎を１つでつくるときに、階段をどうするのかなど、実はいろいろな検討課題があるということがわかってきました。

何かご感想等ございましたらお願いします。

委員

保健室の養護教諭を２人でというお話がありましたが、小学生と中学生では保健室に求めるニーズがかなり違っているということが書いてあります。中学生は保健室にけがを治しに来るというよりも、相談しに来ることがかなりあると思いますので、やはり小学生のいる前では相談しにくいということなのですね。そこは本当におっしゃるとおりだと思いました。

部会長

子どもたちの発達段階に合わせた対応ができるような体制にしていきませんと、小学校の低学年はちょっと運動場でけがをしたとか、擦りむいたとかで手当てという子たちが多いのですが、上になってくると少しメンタルな部分の相談などいろいろな相談のある子供が増えてくるので、それに対応できるような体制にしていかなければならないと思います。

委員

学校には備えなければならない日誌や記録簿がいろいろあります。その中で校長として最も

重視するのは養護教諭がつける保健日誌です。小学校と中学校で２冊あるのですが、記載内容の傾向は全く違います。日々何が起きているかというのが一番わかるし、子どもがどういうふうなケガをしているか、来室の目的がどんなふうになっているか、相談内容なども書かれていますから、それに対処することで学校のある程度の全容とは言わないまでも、子どもの様相が具体的に客観的に見てとれるのが養護教諭の保健日誌です。

下川委員

小学校の養護教諭が中学校に異動になることはあるのですか。

委員

制度としては可能です。

委員

本校は 800 人近い小学生がいます。そういった学校が小中一貫ということになると施設・設備的な面で難しい側面があると思います。小中一貫校の規模が大きな課題になると思います。大泉桜学園はそこの利点がすごくあるということでうまく教育課程が組まれていると思います。その問題も、施設・設備における課題の中に含まれていくのではないかなと思っています。

部会長

大泉桜学園はこのぐらいの規模ですから運営できている面もあります。品川の 1,200 人ぐらいの小中一貫校になると大規模校過ぎて、いろいろな面で運営上かなり厳しいと聞いています。運動会をどうするかなど、学校行事を一緒にできない部分があります。

ですから、規模という問題もある程度の基準づくりと考えていかないと、野放図に小中一貫にしましょうということで大きな学校をつくっていくと、かえって子どもたちにとっては厳しい状況になる可能性もあります。

全体を通じてご感想なり、ご質問なりございましたらお願いします

特になければ事務局のほうに一度お返しします。

事務局

ありがとうございました。前回と今回と、個別のデータをもとにしながらさまざまなお考えをいただきました。これを積み重ねながら最終的な成果と課題の整理というところに持っていきたいと思いますので、また今後もよろしくお願いいたします。

（閉　会）